

開催地名	群馬県安中市
開催日時	令和7年12月18日(木) 13:30 ~ 15:00
開催場所	松井田文化会館小ホール
語り部	大内 幸子(宮城県仙台市)
参加者	民生委員、消防関係者、市議員など 100名
開催経緯	水害対応の強化研修として、この講演会を企画した。複数の川に挟まれており、水害が懸念される地域である。講演会でのお話は今後の災害対応の大きなヒントとなるはず。行政だけではなく、地域全体で守れるような体制を築いていけるよう勉強させていただきたいと思う。
内容	<p>「地域防災の取り組みと自助・共助の重要性」  — 東日本大震災から学んだこと —</p> <p>(1) はじめに  10月1日、これまで経験したことのないような大雨で、“バケツをひっくり返したような大雨”というものを経験した。台風による大雨はこれまでも何度か経験してきたが、雨の降り方が昔とは違ってきているのである。  私は総務省の仕事をして約10年になるが、今までに水害が起こったことがあるところは、また必ず起こると思ってほしい。過去に川の氾濫があり整備をして「もう絶対大丈夫」と言われていた地域でも、私が行った一年後に再び台風で被害が出た。今日はそのことも含めて、いろいろなお話をしたい。</p> <p>(2) 地域の特性と過去の水害経験から得た教訓  これは、私の住んでいる地域のハザードマップである。この地域には小学校が五つ、中学校が三つ、高校が二つあり、さらに災害拠点病院である東北薬科大学病院も存在している。東日本大震災の際、この病院には多くの住民が殺到したが、拠点病院であっても十分に機能しなかったという反省が残った。そのため現在では、一般の人は病院に集中しないよう、周辺のマンションなど複数の建物に分散避難できる体制が取られている。  七北田川という大きな川と、梅田川という小さな川に囲まれた地域で、ハザードマップでは紫色に網掛けされており、避難情報が重要な地域である。私は以前から、避難勧告ではなく、できるだけ早く避難指示を出してほしいと感じてきた。なぜなら、避難勧告では多くの人が動かず、避難指示ですら動かない人が少なくないからである。指示の出し方一つで、人の命の行動は大きく変わると実感している。  昭和61年、私の住む福住地区は台風により甚大な被害を受けた。当時は「線状降水帯」という言葉はなかったが、1日半で400ミリ近い雨が降り、排水が追い</p>

つかず、川の氾濫ではなく内水による被害が発生した。あっという間に水深は約3メートルに達し、200台近い車が水没した。夜中に目を覚ますと、すでに床上まで水が来ており、逃げる間もなかった人が多かった。当時は自主防災組織もなく、避難所運営という概念もなかった。町内会長が腰まで水に浸かりながら、高砂小学校への避難を呼びかけたが、避難が遅れた人の多くは自宅で被災した。学校の先生が対応してくれたものの、職員室も水没し、結局二階に避難するしかなかった。この災害を通じて、支援の受け入れ体制が整っていない怖さ、行政や消防、自衛隊も簡単には入ってこられない現実を痛感した。

### (3) 自主防災組織の立ち上げと地域力を高める取り組み

この水害をきっかけに、「自分たちの町は自分たちで守る」という意識が少しずつ芽生えた。しかし、実際に自主防災組織ができたのは、それから17年後の2003年である。その間も町内会では夏祭りだけは継続し、子どもから高齢者まで顔を合わせる機会が保たれていた。

自主防災組織の立ち上げにあたり、まず行ったのが安否確認のための名簿作成である。個人情報保護法の問題はあったが、顔の見える関係が築かれていたこともあり、要支援者名簿、町全体の名簿を作成することができた。現在では九割以上の世帯が名簿に登録しており、年に一度、防災訓練前に更新している。

また、災害時に外部から人が入ってきた経験を踏まえ、地域内外の団体と災害協力協定を結んだ。子どもの登下校見守り、青色パトロールなどのボランティア活動も継続し、日常から地域力を高めることを意識してきた。

2004年の新潟県中越地震では、町内会として義援金を集め、物資を届ける活動を行った。夜中に役員で車を走らせ、小千谷市池原地区にボランティアとして入った経験は、地域の連帯感をさらに強めるものとなった。こうした活動の積み重ねが、後の大災害への備えにつながっていくことになる。

### (4) 東日本大震災での避難所運営と共助の重要性

2011年3月11日、震度6強から7の東日本大震災が発生した。これほどの地震は初めてで、町全体が混乱に包まれた。津波は直接来なかったものの、七北田川を遡上し、その力の大きさを実感した。

私は防災部に所属していたため、集会所や指定避難所である小学校の運営に関わった。水や物資を運び、夜中まで動き続けた。事前に中学生と防災訓練をしていたことが大きな力となり、彼らは水汲みや子どもの世話などを積極的に手伝ってくれた。訓練の積み重ねが、いざという時の行動力につながることを実感した。避難所では、男性主体の運営が多く、女性や高齢者、子どもへの配慮が十分とは言えなかった。災害弱者と言われる人たちが大半を占める中で、細やかな視点の

必要性を強く感じた。また、行政や自衛隊、消防も同じく被災しており、公助がすぐには機能しない現実を目の当たりにした。だからこそ、共助が不可欠であり、近所同士で助け合う意識が命を守る。

#### (5) 女性防災リーダー活動と人材育成

震災後、過去の災害の教訓が十分に伝承されていなかったことにも気づかされた。波分神社など、津波の到達点を示す記録があったにもかかわらず、語り継がれていなかった。人から人へ伝えることの重要性を痛感した。

私は仙台市地域防災リーダー（SBL）養成講座を受講し、女性防災リーダーネットワークの立ち上げに関わった。女性の視点を防災に取り入れることで、子どもや高齢者、多様な人々を巻き込み、分かりやすく、優しく、楽しい防災を広めることができると考えている。

SBLは地域に根ざした活動を重視し、名簿を共有することで行政や学校、町内会と連携しやすい体制を整えている。赤ちゃんと母親の防災講座、多文化共生の講座、転勤者向けの講座など、対象に応じた取り組みを行ってきた。特にトイレ問題は深刻であり、簡易トイレの重要性を伝える活動にも力を入れている。

#### (6) 学校・地域一体の防災訓練とこれからの課題

私の地域では、小学校・中学校・地域が一体となった防災訓練を10年以上続けている。授業の一環として行い、子どもたちは自分の住む町に戻って地域の防災訓練に参加する。これにより、顔の見える関係が築かれ、地域全体の防災力が高まっている。

訓練では、旗を使った安否確認、車椅子介助、炊き出し、消火器訓練、災害救助犬の実演など、実践的な内容を取り入れている。ただし、時代とともにやり方を変える必要も感じている。ほうきで掃くという表現が通じない子どもたち、暑さや寒さによる避難所環境の課題など、新たな問題が次々と現れている。

近年は猛暑や厳寒時の避難も課題となり、ライフラインが止まった状況での避難所運営の難しさが浮き彫りになっている。現場の声を行政に伝え、喧嘩をせず、粘り強く改善を求めていくことが重要である。

災害は必ず起こる。その時に命を守れるかどうかは、日頃の備えと人のつながりにかかっている。私はこれからも、現場で得た経験を語り、次の世代へ伝え続けていきたいと考えている。

#### (7) さいごに

	<p>これは2年前に聞いた話であるが、世界で起きている自然災害のうち1割が日本で起きていると言われていた。しかし今はそれ以上に増えていると感じている。私は総務省の仕事をして10年になるが、呼ばれるのは「災害がない」「いざ来たらどうしていいかわからない」という地域であり、危機意識を高めるために話をしている。大きな災害を経験した地域には、すでに呼ばれない。</p> <p>10年前から活動してきたが、その後、日本中で災害が起きている。私が行ったからではなく、これまで災害が来なかった場所にも起きているのである。昔に災害があった地域には、やはりまた来ると自分の経験から思っている。災害はいつでもどこでも起きる。</p> <p>持続可能な防災・減災の取り組みを続けるには、子どもと大人、学校と地域が一緒に関わることが重要だと考えている。ただし、少子化や高齢化など事情は地域ごとに異なり、同じやり方が当てはまるわけではない。若い人がいても関心を持たない場合もある。</p> <p>それでも活動を継続できれば命は助かる。防災活動では心が折れることも多いが、諦めずに続けてほしい。東日本大震災を通じて、人の命と人とのつながりの大切さを学んだ。命を大切にするには、防災・減災に取り組むことだと気づいた。今日の話が一つでもヒントになれば幸いに思う。</p>
開催地より	<p>自助・共助の重要性が言われているなか、顔の見える関係がいかに重要であるということが再認識できた。特に印象に残っているのが、地域のつながりを作る基盤が「夏祭り」であるということである。</p> <p>引き続き地域防災力の向上に努めていくため、今後も自主防災組織の支援や地区防災計画の策定支援など進めていきたい。</p>

